

大人たちが「やっぱり東京のひとは」とささやき合っているのが聞こえた。が、もう何も恐れることなどなかった。

お祭りの衣装である「はっぴ」を肩にかけて玄關を出る佑介が、こちらに冷たい視線を投げてきた。ちよつと凜子が外国の人形をまねて、こども達と遊んでいるときだった。

「ちよつとふざけ過ぎてないか。俺に恥をかかせて、そんなにおもしろいか」

静かな、そしてこの上なく低い声で言うと、佑介は凜子に背中を向けた。

どんな風に東京でふるまっていたとしても、いまここで見る彼こそが、ほんとうの佑介であり、将来の夫の姿なのだ。

佑介に冷たくあしらわれても、凜子は平気だった。それは、先日晴香にかけられた言葉が大きく影響している。

ひとの目を気にすることなく、自分のペースで過ごすようになると、凜子はずいぶんと気持ちが悪くなった。

足の爪の先から頭のとっぺんまで、舐めるよう

に見る田舎の人たちの視線も、思ったことをオブラートに包まず口にする乱暴な言葉も、凜子はさほど気にならなくなった。

一方で凜子は、自分の佑介に対する気持ちは一気に冷めていく速さに、驚いていた。彼に対する自分の愛は、この程度のものだったのかと落胆した。愛と憎しみは表裏一体。いつか聞いた言葉が、心にすくとんと落ちた。

歩道を歩くときにはいつも、自分が道路側にまわり、凜子を安全な場所へと導いた佑介。缶ビールを片手に何時間でも聞こうと言って、凜子の相談にのってくれた佑介。履きなれない靴を履いていて転んだ自分を、部屋までおぶってくれた佑介。

フランダースの犬を観て泣いた佑介。失敗した料理をうまいと言って食べてくれた佑介。凜子がプレゼントしたネクタイを破れるまで使ってくれた佑介。

祭り当日、こども達や神輿を担ぐ男の妻たちは、お祭りの会場である神社に向かった。神輿が御練

りをする広場は、埃が舞い上がり、酒の匂いが充満していた。

黄土色の土埃の中で、佑介たちの担ぐ神輿が舞う。それを見ようと、凧子が到着したときにはすでに、多くの人々が集っていた。

厳しさと、激しさと、たくましさ。まさに、田舎で生き抜いていく心構えを象徴しているような舞だった。

男たちによって、高々と担ぎあげられた神輿の太鼓台には、こどもも四人が座っていた。

彼らは、斜めに傾けられ、いまにも落とされそうになりながらも、安定しない台の上で必死に太鼓をたたいていた。まるでひ弱な少年から本物の強い男になるための儀式を見ているようだった。

太鼓の音に合わせて歌われた伊勢音頭は、何度も何度もくり返され、サビの部分だけなら凧子でも歌えそうな気がした。

凧子はその夜、なかなか眠りにつくことができなかった。昼間のお祭りの熱気と興奮がよみがえり、何度も寝返りをうった。

翌朝、凜子は佑介の家族や親せきに見送られ、佑介とともに東京へと帰って行った。

玄関を出るときも、タクシーに乗り込むときも、佑介はひとりでさっさと行動し、凜子は彼にほうっておかれまいと、必死にあとを追った。

いつもなら、サンダルを履くときも、ブーツの紐を結ぶときも「ゆつくりな」と声をかけてくれる佑介が、ひとり座ったタクシーの窓から、早くしろと、顎で冷たく合図をしている。

佑介は怒っているのだろう。それにしてもこの手の裏の返しかたといったらどうだろう。

自分の身内の前で恰好をつけたかったとか、亭主関白を気取りたかったというのとも、少しちがっていた。佑介は凜子に対して、反旗をひるがえした、と言っても過言ではない。

高松から東京へ帰る旅のあいだ中、ふたりはほとんど言葉を交わさなかった。

お弁当を買ってこようか、とでも凜子が声をかけたなら、仲直りできたかもしれない。ごめんなさい、と滞在中の過ちを詫び、凜子が折れれば、ふ

たりの仲は修復可能であつたかもしれない。

しかし凜子は、その一言がどうしても言えなかつた。

ふたりは、お互いかたくなに口を閉ざし、きらきらと太陽にきらめく瀬戸内海を、別の窓から眺めていた。

凜子の脳裏に、この数日間の間、に佑介と訪れたいくつかの場所がよぎる。

二日目に訪れた金刀比羅宮、プロポーズをされた動物の名のつく通り、ドライブ中に立ち寄つた海辺のレストラン。

このとき、ふたりがともに歩んでいくスタートになるはずの旅が、ふたりを別の方向へと引き裂く旅になろうとしていた。

列車から新幹線に乗り換えたあとも、ふたりは背中を向けて座りつづけていた。他のひとの目に、自分たちはまるで、いましがた出会ったばかりの他人同士に映つたにちがいない。

まもなく東京駅です。

アナウンスが聞こえると、通路側に座っていた

佑介は、そそくさと自分のショルダーバッグだけを肩にかけて、出口へと向かう。大きな土産物の紙袋三つが、凜子の足元に残された。

つかつかと歩いていく彼の姿がついに、凜子の気持ちをさかなでした。

「ああ、こんな男だったのか」

声に出して言ったあと、自分の頬が徐々に上気していくのを感じた。

佑介につづいて凜子がドア付近までいくと、彼は凜子が両手に抱えた荷物をちらりと見て、

「ああ、忘れてた」と、この日はじめて、佑介は凜子に声をかけた。

新幹線を降りたあとも、ふたりの乗る電車は同じだったが、凜子はひと駅歩き、遠回りをして、別の駅から電車に乗ることにした。佑介とこれ以上同じ空間で同じときを過ごすことを思うと、苦痛だった。

帰宅すると、凜子はベッドに倒れ込んだ。肉体的な疲労よりも精神的な疲労が強く、凜子は何時間も眠りこんでしまった。

ようやく目を覚ますと、外は真つ暗で、リビングに戻って灯りをともすと、キャリーバッグと土産の入った紙袋が床に転がっていた。そのありさまが、凜子に香川で起こったすべてを思い起こさせた。

そして、佑介の親戚や近所のひとたちが凜子の陰で囁いた言葉のひとつひとつが、いっぺんに押し寄せる。

「とつつきにくいな、東京のひとは」

「あんな細い体で、こどもなんか産めるやろうか」

「あのお嬢さん、緒方家の長男の嫁としてやっていけると思う？」

凜子は耳をふさいだ。

親戚や近所との結びつきが強く、こどもを産むことが女性の当然の役目だとみなされている家に、凜子は嫁いでいく自信がなかった。

佑介とはお別れをしよう。

この際、自分から身を引こう。

きれいで、後腐れがなく、都合のいい言葉がふと口をついて出た。

しかし言いかたを変えれば、それは立ち向かわずに逃げるということだった。自分の心が傷つかないように、先に手を打つという卑怯なやりかただった。

かといって、佑介にすべてを打ち明け、新しい命誕生のわずかな可能性にかけて、ふたりで乗り越えていく自信はなかった。

乗り越える前に、外野から野次が飛ぶのはもちろんのこと、彼から先に別れを告げられる可能性も十分にあった。

だから自分からおりる。

ほかに選択肢はなかった。

「わたしは瀬戸の花嫁にはなれない」

真夜中、アパートの一室でひとり叫ぶように言ってみた。

涙が溢れ出した。

とつさに、凜子は郵便受けにたまった手紙を狂ったようにあさり、ひとつでも慰めとなる知らせはないかと必死で探した。

水道料金の明細、ピザのチラシ、そして子宮がん検診のお知らせ。

世の中はいつだって無情だ。
凛子は声をあげて泣いた。

(以上7月4日放送分)